

[翻訳]

## イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (4)

工藤 康弘・田島 篤史 訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム (Jörg Wickram) の『少年の鑑』( *Der jungen Knaben Spiegel*, 1554) 本文第八章、第九章および第十章の翻訳である<sup>1</sup>。本稿の二人の共訳者は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第七章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである<sup>2</sup>。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ (Hans-Gert Roloff) の編纂によるヴィクラム全集を用いた<sup>3</sup>。またゲルトルート・ファウト (Gertrud Fauth) およびミヒャエル・ホルツィンガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した<sup>4</sup>。前者はヴィクラム研究の

---

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(2)」、『独逸文学』第59号、2015年、231-241ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(3)」、『独逸文学』第60号、2016年、101-114ページ。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungerathnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhafftige History von einem ungerathnen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen*

第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハンネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した<sup>5</sup>。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

---

*Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digital-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2017年1月4日アクセス)。

## 第八章

ロタールが父親から少なからぬ金をこっそり持ち出し、ヴィルバルトともども町を去ってブレスラウに来たこと。ヴィルバルトがブレスラウから母親に遣いをやって、多額の金を送ってもらったこと。



二人の少年ヴィルバルトとロタールは、とても不安を感じていました。というのも、どの町でもすでに二人の悪名は知れわたり、また露命を繋ぐための路銀も多くは持っていないからです。ロタールは仲間に言いました。「安心しな、ヴィルバルトよ！俺が十分な路銀を探すよ。明日は市が立つだろう。だから俺のおやじは一日中肉屋にいるんだ。おふくろも一緒さ。どうやって家に入れるかを探してみる。きつとうまくいくさ。手ぶらでは出てこないつもりだ。少しでも路銀を用意できたら、別のところへ行こう。こき使われて気づまりな生活を送るくらいなら、自分たちのおやじの家よりもよそでいるほうがいだろう。」

こんな言葉やもっと多くのずる賢い言葉でもって、ロタールは哀れな甘やかされたヴィルバルトに、すべてがうまくいくだろうというひどい妄想を抱かせたのでした。ヴィルバルトは両親に対して子としての忠実

さを忘れて、恥じらいと神さまへの畏れを打ち捨て、自らすすんであらゆる悪徳に身を任せました。

ロタールは父親の家にこっそりと忍び込み、いつものとおり金を手に入れました。ロタールはそこからかなりの額を抜き取ると、再び仲間のヴィルバルトと合流しました。そして長居はせず、暇も告げずにこっそりとボースナの町から出て行きました。何日もしないうちに二人はシュレーゲンにあるプレスラウという町にやってきました。そこでヴィルバルトは金を無心する手紙を母親に書くと、彼女はたいそうな額を送ってくれました。彼ら二人はようやくまぎれもないのらくら者になりはじめたのです。二人は財布に痛いのが、体が喜ぶありとあらゆることをしました。つまり昼も夜も、打つは、喰らうは、飲んだくれるはしていたので、同じ年頃の誰もが、あいつらはどうしてあんなことができるんだ、といぶかしがらずにはいられませんでした。

二人はそんな客人を歓迎する主人のもとにいました。そしてヴィルバルトの持ち金がなくなると、主人は馬にまたがり、ボースナにいる騎士の奥方のもとへと行きました。奥方は愛する息子のわんぱくな生活を支えると、常日頃から心に決めていました。そうしたことが長く続いたので、善良な騎士の財産はなくなっていきました。しかし騎士は奥方に何も言うことはありませんでした。というのも彼女は自分の分しか使っていないと言っていたからです。このような生活をして、二人の「善良な」息子たちは三年間もプレスラウの町で過ごしたのでした。

さてロタールは主人の娘をだまして、彼女と結婚の約束をし、身ごもらせてしまいました。ですが彼は娘の身重を知るやいなや、彼女の父親の怒りが心配になりました。それに娘との約束を守るつもりは毛頭ありませんでした。彼はヴィルバルトと申し合わせて、ボースナに主人をやって金を無心し、そのうえで他の領邦や町々を見てまわろうとしました。ヴィルバルトもこのことに賛成しました。そこで主人にボースナまで馬で行けと命じました。主人はこの仕事をしっかりこなすと、大金を手に入れた日もしないうちに戻ってきました。二人はうまくいったので、それぞれ一頭ずつみごとな馬を買い、主人と清算してこれまでの借金を支払うと、二人はほんの少しの間だけ馬を駆って散策し、すぐに戻ってくるつもりだと主人に信じ込ませました。

この親切で純朴な男は、客を失いたくありませんでした。というのも二人は、三頭の乳牛よりも役に立ったからです。また娘はそれ以上に悲しみました。なぜならすでに彼女の身に降りかかったようなことが、また起こるかもしれないと心配したからです。その少年は彼女をだまし、またさらにだましたのでした。この善良な娘が出産するまでの間、父親と母親にはすべてを隠しておきました。子供が生まれて、はじめて大騒ぎになったのでした。というのも二人の少年がどこへ行ったのかを誰も知らなかったからです。しばらくして子供が亡くなりましたが、その善良な母親はそれほど悲しみませんでした。なぜなら彼女は子供の父親をどこにも見つけられなかったからです。

## 第九章

**ヴィルバルトとロタールがシュレージエンを馬で出奔し、ブラバントへの道をたどり、かの地でようやく昔の行いを始めたこと。**

その「善き」ろくでなしたちは、心やさしい母親が多額のお金を送ってくれたので、自分たちのお金と財産がなくなっていくなどとはまったく考えませんでした。心も軽やかに彼らは次なる歩みをラウジッツ方面へ向け、グログアウという名の町にやってきました。しかしその土地は気に入らなかったのも、長逗留はしませんでした。そこの人たちはブレスラウにおけるほど大きな敬意を二人に示してくれなかったのです。そんなわけで我が若者たちはとどまろうとせず、次の滞在地としてブラバントのアントワープへ向かおうとしたのでした。そこにはまごうかたなき床屋兼外科医たちが住んでいて、瀉血をして財布の中身を搾り取るので、人によっては大量出血したうえ、一銭も残らないのでした。この二人もそれを味わう羽目になるのです。



次に二人はラウジッツに向けて馬を進め、トルガウへ行き、そこからテューリンゲンのハレ、そしてノルトハウゼンへ向かい、そこからテューリンゲンの森を超えてヘッセンの土地へ入り、カッセルで何日か滞在しました。そこはヘッセン方伯が廷臣たちとともに治めていました。二人はきれいな身なりをしていましたが、まったく注目されませんでした。というのも二人は上品な振る舞いができなかったからです。なにしろ彼らは馬上試合よりも破廉恥行為や悪行の修行を積んできたのですから。けっきょく二人はそこも気に入らず、マインツへ向かいました。彼らはライン河畔に腰を据え、馬を売り払い、喜々としてライン川を船で下ってデヴェンターまで行きました。そこでライン川から離れ、手に入れることができた馬と馬車で国を超え、商業都市アントワープへやってきました。こういう輩には起こってあたりまえですが、まもなく二人は当然のごとく金をむしり取られたのでした。

二人はいい主人はいないかと尋ねてまわると、ある人を紹介されましたが、彼はこうした人たちの身ぐるみを剥ぐ名人でした。主人はやさしい、調子のいい言葉で二人を迎え、彼らに奉仕しながら、二人が商人なのか貴族なのかと尋ねました。二人は貴族だと答えました。二人の財布がまだ重いうちは、主人は彼らを若殿と呼んでいました。しかし一般にどこでも店の主人とはそういうものですが、財布が軽くなり始めると、二人をめぐる状況は変わりました。店の主人というものは、客の重い財

布を味わっているときは甘い言葉でお世辞を言いますが、財布がからになるとけんもほろろです。ともあれ、その「善き」若殿たちの初めはブラバント風でした。宴会があるときはいつもきれいな女性たちが侍り、弦楽の演奏がありました。

さて二人をめぐる状況は次のようなものでした。主人が彼らを客として迎えるとすぐに、彼らはお金の入った頭陀袋を預けました。お金が必要になると、二人はいつも主人に請求しなければなりません。しかし主人は計算書をいつも自分で作り、このへんでやめておくかと思うまで続けました。もはやそれほどたっぷり食卓に運ばなくなると、主人はもはや若殿とは呼ぼうとしませんでした。このことは読者のみなさんが聞くことになるでしょう。しかしくだらないおしゃべりでみなさんを煩わせないために、あの二人がどのようにして、どんなぜいたくな暮らしによって財産を浪費していったかを手短にお話ししましょう。

アントワープでの二人は活発でした。彼らは仕事仕舞いの鐘を聞くと、もう「夕べの祈り」へ行かねばなりません。そうさせたのはおいしいマルヴァジアワイン、蒸留酒、ムスカテラーワイン、キジ、ヤマウズラ、野獣やウサギのようなごちそうでした。きれいな女性たちが二人を助け、夕べの宴をいっそう盛り上げました。しかし二人への記憶が一番刻まれたのは、道化師や楽師たちが首に下げている札でした。これは今でも習慣になっているように、二人が彼らに贈ったものです。というのも、彼らに気の利いた言葉をかけ、ヴァイオリンか笛で調べを奏で、あるいはリュートを弾くことができた人が二人の札をもらうことができたからです。このことで彼らはしばらく評判がよかったです。長くは続きませんでした。

二人と主人の間で長らく清算をしていなかったある日、主人がやってきて言いました。「若殿がた、一度新しい帳簿を作り、古いものを清算していただきたいのですが。良い勘定は良い友情と言いますように、私もワインや食料を買うためにお金が必要です。」あつかましさにおいてはいつも一番のロタールが言いました。「おやじさん、俺たちが払うものを持ってないとか、もう金がないとでも思ってるのか。もう使い果たしたと言うのなら、行ってお前の帳簿と俺たちの袋を持ってこい。支払いを済ませ、お前よりも信用してくれる主人を探そう。」主人は考

えました — 彼らはいいい客だ。きっと私の手元にあるより多くのものを持っているだろう。そうでなければこれほど金払いはよくなかっただろう。彼らのわだかまりを早く取り除いてやらねばならない。お金はまだ飲み食いを使い果たしてはいないだろう。 — こう思って主人は言いました。「若殿がた、私の言ったことをそんなに悪くとらないでください。あなたがたのために言っただけですから。額が大きくなりすぎて、私が多く勘定につけたと思われたいのためにです。」ロタールが言いました。「そんなことは思っていないよ。あんたの会計は良心的だった。」主人は言いました。「そうですとも。あなたがたの気前のよさには感服いたします。」こうしていざごは終わりました。

さあ、「善き」若者たちにはたっぷり散財させることにして、身分の低い貧しい親から生まれたフリートベルトとフェーリクスがその頃どうしていたのか、また善良な老騎士が生涯を終え、あとに残したものがわずかだったことを少しお話ししましょう。遺産が少なかったのは、みなさんもお聞きのとおり、浪費家の鳥たちのせいで、すべてなくなってしまったのと、加えて母親がせっせと援助したからです。

## 第十章

**フリートベルトとフェーリクスが大学へと進み、たいそう勉強したので、フリートベルトはわずかな期間で教養課程を修了し、そのあとすぐに博士号を取得して、プロイセン宮廷の法務長官になったこと。一方、フェーリクスは医学の分野でたいへん有名な博士となり、顕職に就いたこと。**

二人の少年の悪徳ばかりが強調され、礼儀正しさと勉学への熱心な取り組みが、その功績とともに明るみに出されないのであれば、それは恥ずべきことでしょう。聞いてください。ヴィルバルトがロタールと一緒に、いつまでも悪さばかりしてそそくさと逃げ出したあと、二人がどこへ行き、どこに滞在しているかを知る者は、母親のほかには誰もいませんでした。善良な老騎士ゴットリーブはひどく心を痛めていました。しかし彼は養子のフリートベルトに慰めを見出していました。フリートベル

トは、学校でも家でも熱心に読書に勤しみました。同い年や年上のどの少年たちよりもはるかに優れていたもので、教師や世話係もたいそう喜んでいました。



とある宴席に、その教師が老騎士から招待されました。老騎士は教師に、フリートベルトのことをどう思っているか、将来ひとかどの男になると思うか、といったことを尋ねるつもりでした。教師は答えました。「厳格なるご主人様。フリートベルトの能力は申し上げるまでもございません。私が教えてきた他のどんな生徒よりも優れております。まことに神さまがフリートベルトに生命をお与えになったからには、彼を大学に行かせないのはもったいないことです。どの学部で学ぼうとも、彼はりっぱな男になりましょう。」

善良な老騎士はこの言葉をしっかり心に刻むと、大きなため息をついて言いました。「おおフォルトゥーナよ、お前はなんと気まぐれな運命の女神なのだ！誰がお前のことを頼りにするというのだ？きっと誰もしないだろう。お前が微笑みかければかけるほど、われわれはお前の抜き

身の刀を恐れねばならない。お前の輝きが増すほどに、お前の下にはより深い闇や霧、そして暗黒が隠れているのだ。雲が太陽を追いやるよりもはやく、それらがお前の輝かしい光を覆い隠してしまう。私こそがほかにはないくらいよい例だ。このフリートベルトを、私は大きな同情ゆえに、彼の父親の豚小屋、耕作地、そしてあばら家から連れてきて、私が神さまから授かった実の息子の仲間にしようとした。というのも、私が仲間を持たせてくれないという不平を、ヴィルバルトに言わせないためだった。そのうえ二人に傅役をつけた。この傅役には息子のためにこれ以上の責任を負わせられない。彼はできる限りの勤勉さで励んでくれたのだから。だが一体何が起こったというのだ。おお運命の女神よ、お前は私の農夫の息子を慈悲深い目で見てくれた。貴族の血から生まれたもう一人の息子は、恥ずべきことにお前は足蹴にしたのだ。それゆえ、お前のことなど何一つ信じられない。おお不誠実な運命の女神よ、私を、この哀れな騎士を、なんとという悲惨な目に遭わせたのか！私はこの息子にあらゆる期待を寄せていた。だがほかにもどうしようもないので、創造主である神さまの思し召しにお任せして、我が息子を心の中からすっかり追い出してしまおう。そしてこの養子フリートベルトを正統な愛すべき息子として受け入れよう。神さまのご意志が、おそらくそう決めておられるのだから。」

こうした騎士の言葉に、妻はたいそう苦しみを受けたので、テーブルを離れて床に伏せねばならず、悲嘆と涙と苦痛とでもって時を費やしました。そのため数日間は彼女の体を激しい痛みが襲い、ずいぶんと長い間これを追いやるのが難しかったので、けっきょく体が弱って死んでしまったのでした。これにより、善良な老騎士に新たな苦しみが生じ、彼は妻なしで人生を送る覚悟を固めたのでした。

フリートベルトは老騎士の息子であり、傅役のフェーリクスとともに執事でもありましたが、彼はすでにその傅役の域に達し、今まさに追い抜こうとしていました。フリートベルトの父はすでに亡くなっています。彼は息子たちと娘たちを残しましたが、皆がすでに大人になり、自立して農業を営んでいました。老騎士ゴットリーブは、今やかなりの高齢になっていたフリートベルトの母親のパトリクスを引き取りました。彼女は下女やその他の使用人たちについての家事の一切を取り仕切りました。

一方、下男たちのことは、今まさに真の男らしさと思慮深い知性を身につけんとしているフリートベルトが監督していました。ゴットリーブは隠居して、全能なる神さまにのみお仕えしたいと思っていたのですが、引き続き騎士団長の宮廷に出仕していました。彼はそのような職務から解放されなかったのですが、その徳と誠実さのゆえに、彼の主人は今の職を解こうとはしませんでした。ゴットリーブはその年齢のせいもあって、すべての廷臣のうちで一目置かれていました。というのも彼は、最も卑しい人にも、最も偉大な人にもやさしく接することができたからです。

